VARÓN DE DIOS

（神の人）

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
九州教区　壮年部　2021 年 5 月号

ハレルヤ！主の御名を賛美します。この度、九州教区壮年部の広報誌を発行することになりました。現在九州教区 22 教会には 50 歳以上の壮年部の方が 96 名（教職者も含む）在籍しておられますが、日頃他の教会の方々と交わりを持つ機会がほとんどないため、どのような活動をしておられるのか、またどんな信仰生活の証をお持ちなのか、互いに知ることができません。そこでこの広報誌を通して、各教会での壮年部の方の活動と、信仰の証を紹介することで皆が励まされ、さらに主の栄光の表される教会、教区となっていくようにと願っています。

実は 1998 年の 9 月に、その当時の壮年部担当であった熊本聖書教会の長澤忠雄師が、「教区壮年」というタイトルの広報誌を創刊しておられます。私の手元には 2005 年 9 月号までの資料がありますが、教職者の随筆や信徒の証などが掲載されています。

またそれよりも前の 1996 年には、「教区壮年」という題の小冊子も発行されています。2002 年の秋にはバプテスト連盟の友納徳治師を講師に招いて、佐賀県武雄市の「かんぽの宿」において、「新しい生き方の発見（人間の生涯の領域）」というテーマで 1 泊 2 日の修養会が開催され（参加者 21 名）、2004 年にも同じ内容で修養会が持たれています。

今はコロナ禍で壮年部員が一緒に集まることは困難ですが、ズームを使えば自宅にいながらオンラインのセミナーに参加できます。様々な手立てを取りながら、「生き生きした信仰者」「聖霊に満たされた壮年」を目指していきましょう。

最初に紹介するのは、熊本県にある「川尻キリスト教会」です。川尻キリスト教会には壮年部員による聖歌隊「さんびーず」があり、多方面で活躍しておられます。牧師の高口喜美男師から原稿を頂きました。

男性聖歌隊「さんびーず」

川尻キリスト教会　　河添恵一郎

私は今年「古希」を迎えますが、神様に健康を祝していただき、今も、元

気で働く職場をあたえられていることを感謝しています。

しかし、結婚して、３人の子供に恵まれましたが、まだ、子供たちが幼かったころ、大病を患い、緊急入院し、以後、長い間、病状が改善せず、入退院を繰り返して、会社も退職せざるを得なくなりました。家族に申し訳ない気持ちとともに、希望を持ち続けることがつらかったことを思い出します。

それでも、信仰を共にする家内をはじめ、家族親族の愛や、教会の兄弟姉妹の祈りに支えられ続け、まさに奇跡的に癒された時の喜びを忘れることはありません。その後、いくつかの職場を経て、今また、新しい職場も与えられ、働くことができていることも感謝です。健康のありがたさを、しみじみ感じています。

ふりかえって、あの熊本大地震や、豪雨での浸水等の被災に、疲れ切って対処していた時、追い打ちをかけるように家内が癌の告知を受け、言葉を失いました。ただ、呆然となりました。その間、余命２ヶ月と言われた頃、私に手紙をくれました。当時の病状を考えると、書くことさえ、とても困難だったのですが…これまでの夫婦として生きてきたことへの感謝の言葉に、胸にこみ上げてくるものがありました。そして、発症から僅か７ カ月後に召されました。家内とともに過ごした歳月の思い出が支えです。

悲しさと寂しさの中から、私には「主を求める」気持ちが強くなってきました。そして、「主に喜ばれるように生きていきたい」、また、「主を賛美したい」と心の中から願うようになりました。教会の壮年信徒の方々に相談して、男性聖歌隊が生まれたのです。主を賛美する者たちということで「さんびーず」と名づけました。

これまで、クリスマスや賛美礼拝、また、特別集会で賛美しています。白いワイシャツに黒の蝶ネクタイ姿の、ちょっと、オシャレに、楽しく、喜びとともに心から賛美する様子は、まさに、私が夢で見たことが実現した姿でした。

教会の週報の表紙には、これまで「私の好きな聖句」が、毎週、ひとりひとりの手書きで掲載されてきましたが、今年から、「私の一字」になりました。信徒各自が思い浮かぶ一字を大きく手書きし、短いコメントを書き添えるのです。私は「従」という字にいたしました。この一字が、今の私に一番必要と感じたからです。「神様、こんなわたしですが、従って行きます。どうぞ、よろしくお願いいたします」という祈り心からです。

年齢を重ねて老いを迎え、少しずつ不自由を覚える頃になりますが、主にあって、充実した日々の生活に感謝するばかりです。

川尻キリスト教会の報告

牧師　高口　喜美男

川尻キリスト教会は信徒の平均年数がだんだん高くなってきました。

大きな課題です。しかし、青年のような感性をもって、様々な奉仕に励んで下さっています。

◎男性聖歌隊「さんびーず」。ひらがなにしたのが「レトロなおじさんたちのセンス」です。河添兄のお証しにありますように、壮年信徒の話しあいの中から２年前に生まれた（女人禁制？）の男性聖歌隊です。

　これまで、聖書講演会（特別伝道会）、讃美礼拝、クリスマス礼拝等々で讃美しています。その時々で、メンバーが少し変わりますが、いつも10名くらいでの奉仕です。好評です。写真をごらん下さい。

召天者記念礼拝での紙芝居

◎紙芝居　これも、壮年信徒の話しあいの中から生まれました。時代の流れに逆行するようですが、自作のストーリーに手書きの絵と、ふたりの語り。何とも温かい手作りです。

　第１作は「天国へのパスポート」でした。演じるひとり、河添兄は労苦を共にされた愛妻を御国に送られたばかりです。もうひとりの深川兄は、結婚されて、楽しみにしていた第１子を、予定日の10日前に、臍帯が首に絡み、心音が途絶え、喜びのはずの初産が死産という悲しい現実を経験されました。ヨハネ14章６節から「真理=まり」と名づけて、牧師としても痛恨の葬儀を行ないましたが、その時、深川兄は「真理は母の胎から御国に召されました。僕は、御国で真理に会えるように、主を見上げて生きていきます」と言われ、その通り、30年を越えて、誠心誠意、信仰生活を続けておられます。この二人が、天国での喜びの時をもつ幸いを、ユーモアも加えつつ、まるで、伝道メッセージのような台本を作り、絵も描いて、クスマス礼拝、召天者合同記念礼拝で演じられました。感動的でした。目下、第２作に取り組み中です。

◎礼拝ではピアノとエレクトーンで伴奏していますが、リビングプレイズを歌う時は、それらにギターが２本、新しく、高橋兄のリズム打楽器のカホンがタンバリン付きで加わりました。これらも壮年信徒の方々が奉仕をされ、礼拝讃美を豊かにしています。

広報誌の名前を「**VARON DE DIOS**」（バロン デ ディオス）にしました。これはスペイン語で「**神の人**」という意味です。

九州教区　壮年部担当　松尾　敬文
福岡市東区水谷 1-14-3
福岡キリスト教会　092-681-5501